

金沢大学附属図書館〈環境学コレクション〉公開シンポジウム  
2013年7月20日、金沢大学自然科学系図書館AVホール

## 里山ブームとは何か——風景、場所、ゾーン

---

結城正美

# 里山とランドスケープ

---

Satoyama as Landscape

「里山とは、人間の居住地とともに二次林、農地、ため池、草地を含む異なる複数の生態系からなるモザイク構造のランドスケープを表す日本語である」

(『里山・里海——自然の恵みと人々の暮らし』朝倉書店, 4)

“*Satoyama* is a Japanese term for landscapes that comprise a mosaic of different ecosystem types including secondary forests, agricultural lands, irrigation ponds, and grasslands, along with human settlements”

(Duraiappah, et al. 3)

ランドスケープ (landscape): *Oxford English Dictionary*の定義

“A view or prospect of natural inland scenery, such as can be taken in at a glance from one point of view”



## landscape

Landscape, whether in the physical environment or in the form of a painting, does not exist without an observer. Although the land exists, 'the scape is a projection of human consciousness, an image receiver' (Erlich 1987). Mentally or physically, we frame the view, and our appreciation depends on our frame of mind. (Porteous 4)

Landscape ≠ Land

Land+scape:

見る者(observer)によって知覚された土地

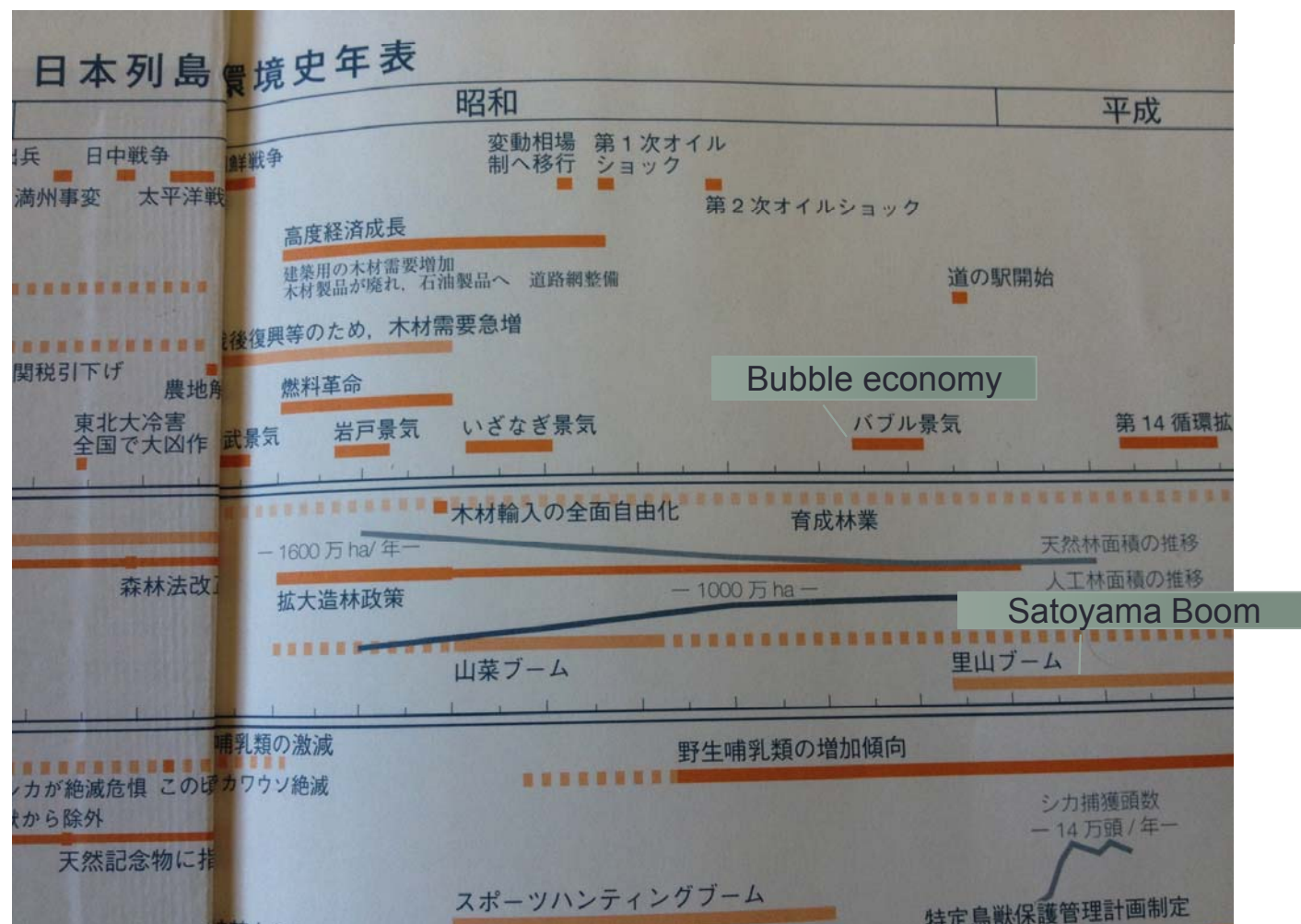
## 里山ブーム

1970年代：生態学的重要性が着目される

1980年代後半：里山保全活動、里山ふれあい活動の展開

1990年代：里山ブーム

## Satoyama Boom after economic bubble burst



湯本貴和編『環境史とは何か』

## 今森光彦 (1954- )

『今森光彦昆虫記』(1988) 1989年第6回アニメ賞受賞

『世界昆虫記』(1994) 毎日出版文化賞受賞

『里山物語』(1995) 木村伊兵衛写真賞受賞

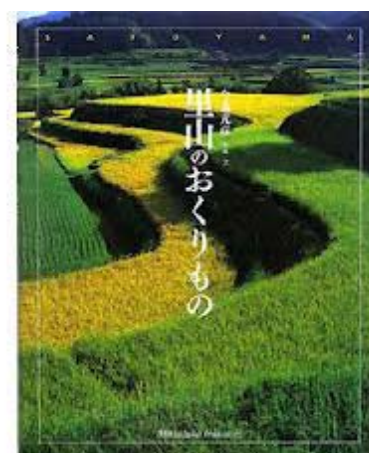
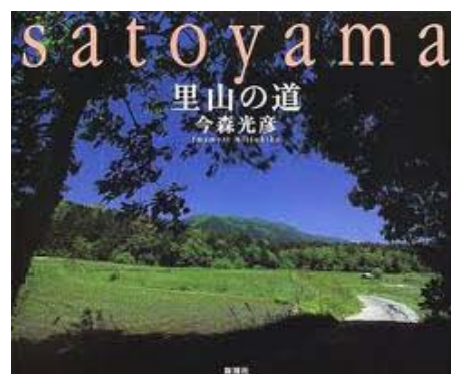
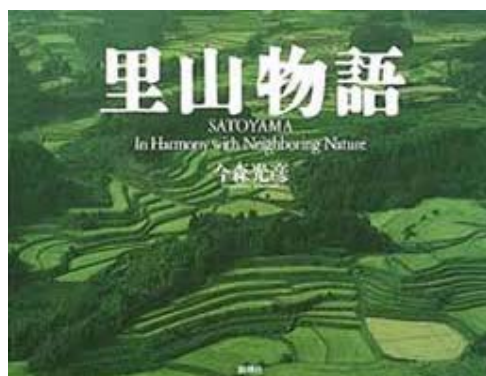
企画展『生命の小宇宙 里山』(1998)

写真集『萌木の国』(1999)

ハイビジョン作品「映像詩 里山」(2000)、「里山 命をめぐる水辺」(2004)

撮影と映像監督

NHK BSハイビジョン「今森光彦が見つめたニッポンの里山」シリーズ(2010)



## NHK ハイビジョン里山シリーズ

1998 映像詩 里山 人と自然がともに生きる) (11/9)

2004 里山 命めぐる水辺 (4/17)

2005 English edited versions of NHK's Satoyama series on BBC  
ナレーター: David Attenborough

2007 世界の里山 フィンランド (8/19), ポーランド (8/26), 中国 s(8/27)

2008 映像詩 里山 森と人 響き合う命

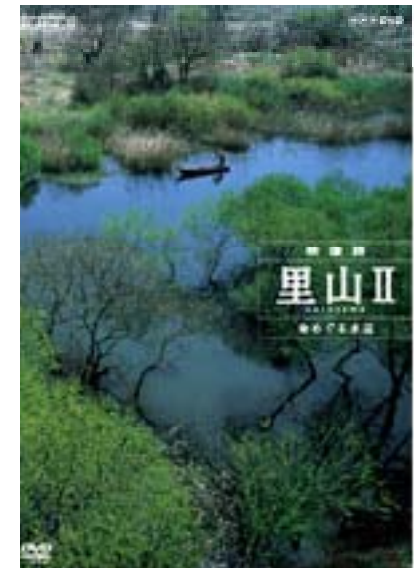
2009 映像詩 里山 劇場版



## NHKハイビジョン 里山シリーズ

- 里山の豊かな生物多様性を強調
- 人間と自然環境の〈共生〉に関心が向けられている
- アメリカ的自然環境(野生環境)保護とは一線を画すアプローチ  
(チェーンソーによる木の伐採ではじまる劇場版の冒頭シーンに顕著)
- 人間同士の関係は着目されていない

➔山林や田畑の相続  
(家父長制)など



## 「里山オリエンタリズム」

一九世紀のゲルマン世界のロマン主義にみられるように、西洋の足許にも近代主義への反動としての自然回帰があった。西洋の優位を誇示するオリエンタリズムの裏返しとして、近代西洋文明が自然を征服し、支配してきたことに対して批判的な欧米人が、アメリカ先住民や東洋、特に日本に、自らの内部としてもたなかった「自然と『共生』する」理想像を投影し、一部の日本の知識人がその投影に自己同一化を図ったと見ることはできないであろうか。そして、日本の中でも、「自然と『共生』する」姿を、北海道の先住民であるアイヌ民族に投影することが行われてきたのではないか。

そのオリエンタリズムのひとつの現れが、里山問題であったのかもしれない。(湯本貴和編『環境史とは何か』17-18)

## ボランティアの場／くらしの場

「ある高名な写真家は、ファインダーから覗くと、ボランティアが管理する里山はどこか違う、と言う。地元の人が利用している里山とは、単なる管理技術の差でない違いが浮き出るのだそう。たとえば、雑木林や棚田の維持のために草刈りや伐採を行う点では同じでも、本来は刈った草や落葉を堆肥にし、伐ったクヌギを炭焼きやシイタケ栽培に利用する。しかし通常ボランティアは、そこまではできない。伐られた草木は、そこで循環を止めてしまう。そんな点が情景に滲み出るのだろうか。」

（田中敦夫『里山再生』、有岡『里山II』207-08に引用）

# 里山と場所

---

Satoyama as Place

## 大牟羅良『ものいわぬ農民』(1958)

- ・ 農村の「くらしの声」を聴く

### 「生きている農村」(場所) ⇔ 調査対象の農村(風景)

- ・ 「...都会人が調査とか研究とかで農村にこられ、その結果を公表され、またいわゆる啓蒙とか指導をして下さることは、必要なことだと思います。しかし調査なり研究なりが、どれだけ生きた農村や農民の姿を正しくとらえてなされているかが大きな問題だと思います。農村の諸官庁、諸団体のおえら方に会い、改まった様子を聞きとり、後は諸統計や資料などを元に、手ぎわよくまとめたものが、新聞に雑誌に発表になるといった形のものも少なからずあるような気がします。そしてそこには現実に生きている農村や農民の姿が置き去りにされてはいないでしょうか？」(191-92)

## 大牟羅良『ものいわぬ農民』(1958)

岩手の春も、山蔭に雪をのこしたままで、種蒔ざくら(こぶし)の咲く季節でした。今までに何度も寄って親しくなっていた農家があって、その日もいろいろ端で休ませてもらい、キセルにタバコを吸いつけながら「種蒔ざくらも咲く頃になって、気持よくなりあしたなあ」と、その家のヨメさんに話しかけると、「んだなす(そうですね)。だども、おらアあの花っコア咲けば嫌んたになりあんす」というのです。(中略)

こぶしの花が咲くと、いよいよ  
野良仕事が始まる、そして夏が来て、  
秋が過ぎ、冬が訪れ、里が雪に埋も  
れる日までは、働きつづけに働かな  
ければならない、その野良仕事の  
前ぶれとしてのこぶし、そのこぶしが  
咲くと憂鬱になる・・・といったことでした。  
(79)



## 大牟羅良『ものいわぬ農民』(1958)

・・・意外に高価な、錦紗の羽織とか袴のようなもの、サージの背広といったものが売れるのでした。何故なのか？ 一、二年している中に次第にわかるような気がして来ました。それは農家の生活に普段着を着てくつろぐ時間がないからではなかろうか？ということでした。野良から帰れば、夕食を食べて、そして丹前に着換える生活、つまり労働着と外出着があればこと足りる生活故ではなかろうか——ということでした。そういえば、私には農村の夕ぐれ方、浴衣など着て口笛を吹きながら散歩している青年など、ついぞ見た記憶がないのです。漁村でよく見かけた海岸の岩に腰かけてマンドリンを弾いていた青年——そんなものはもちろん見られませんでした。そしてこの農村の衣類の売れ行きの中に、農村の人々の生き方が、象徴的にあらわれているような気がします。というのも農家生活には働く生活とつきあいのための改まった生活とがあり、その中間の日常生活を楽しむという生活が欠けている——それは日常生活を楽しむような余裕のないことを物語るものでしょうけれど、また反面求めようとする考え方の不足にもあるのではないか？  
(48)



いり端に古着をひろげると、家族の人たちが、そのまわりに集まってくる。そんな時農家の人たちは「見るのゝただだんべ」「目の極楽だ」などと言いながら見てくれるのでした。(中略)その家の主婦や娘さんたちが、「この柄ゝいいゝ」「この色具合、おらゝ一番好きだ」などと言いながら・・・そんな時、品物に手をふれずに後の方で遠慮深く眺めているのはヨメさんでした。また二、三男らしい人もあまり口出しはしないようでした。漁村だと子供たちで「おれはこれほしい、父ちゃん買ってけろ！」などと、ずいぶん無理を言う子供たちがいるのですが、農村では「わがねえってば(ダメだったら)」と言われればすぐひっこみ、「なに、おらゝ、今日までにスルメを七百五十も釣ったってば・・・」などと言ってがんばる漁村のような子供はいませんでした。(52-53)

➡〈里山〉と〈里海〉における生活様式、価値観のちがい



あれやこれやと品定めして、娘さんの裕一枚とか、羽織一枚を買う——といったことになるのですが、(中略)結局はその年齢層によって色具合や縞柄がきめられるようでした。つまり自分がこれを好きだから買うというのではなくて、世間の人がどう見るかというめやすで、買っているようでした。こんな選定条件で買う物がきまると、親父さんに伺いを立てる、すると親父さんは「いがべや(いいだろう)」ということになり、財布から金が出されるといったことになるのでした。(53)

→農村における家父長制の強さ

# 里山とゾーン

---

Satoyama as Zone

日本の原子力発電所

<http://www.gengikyo.jp/facility/powerplant.html>

避難指示区域の概念図

[http://www.kantei.go.jp/saigai/pdf/20130507\\_futaba5.pdf](http://www.kantei.go.jp/saigai/pdf/20130507_futaba5.pdf)

福島「あぶくま里山王国」

<http://www.abukuma-shinkou.org/top.html>

志賀町公式サイト

<http://www.town.shika.lg.jp/shikasypher/www/movie/satoyama.html>

守りたい伝えたい福井の里地里山

[http://www.fncc.jp/joho\\_kensaku/syuzo\\_siryo/satochi\\_satoyama/sato1.htm](http://www.fncc.jp/joho_kensaku/syuzo_siryo/satochi_satoyama/sato1.htm)

## 原子力発電所の立地適地

「原子力施設の立地適地は、地盤が堅牢で、近くに活断層などがなく地震に強いこと、人口密度が低い事などである。(中略)

過疎地で、交通が不便で、他の産業の工場や事業所の立地が困難で、原子力施設の誘致を契機とする「開発」への幻想を抱きやすかったり、電源三法交付金の支給をメリットとして受け止めやすい構造的条件を備えていることなども、表向きには語られないが、実質的に重要な立地のための社会的条件である。原子力施設は、事実上、地域格差を前提に、あわせて後進地域の財政的・精神的な中央政府依存を積極的に利用して立地がすすめられてきた。」

(長谷川公一『脱原子力社会へ』48-49)

## 過疎に悩む里山／観光や保全の対象とされる里山

両者は、正反対の里山のとらえ方のようにみえるが、  
果たしてそうなのか。

## 田口ランディ Taguchi Randy

### *Hope in the Age of No Reliance* (2006)

--including an essay on a village downwind of Chernobyl



### *In the Zone* (2013)

--four novellas on a zone in Fukushima



## 里山とゾーン

### 『寄る辺なき時代の希望』

(ブジシチェ)村の様子は牧歌的だった。ようやく紅葉を始めた木々が風に揺らぐ。牛たちはのんびりと草をはみ、泉が湧き、湿地の茂みにアヒルたちが遊んでいた。大地は果てしなく続き、空は高く青かった。(中略)そこは決して死の世界ではなく、生命に満ちあふれていた。(中略)

「美しい村だねえ。ここが放射能に汚染されているなんて思えない」

私の言葉に、コーディネーターのKさんもうなずいた。

「ほんようにそうよね。ここには放射能以外の汚染はなにもないわ」(141)

### 『ゾーンにて』

- 「車はいつしか市街地を抜け山あいの国道を走っていた。東北の緑は柔肌のように優しくて目になごむ。瑞々しい里山がずっとずっと続いている。しばらく走ったらカーナビの地図に飯舘村という地名が現れた。」「ゾーンにて」11)
- 「ゾーンは緑、ただ緑のみに埋め尽くされていた。少なくとも私の目にはそう見えた。だんだん緑色が禍々しいように思えてくる。」「ゾーンにて」35)
- 「この牧歌的な風景に重なるように見えない放射線量は十マイクロシーベルト」(35)

## ゾーンと〈場所の感覚〉

老人たちは大地と共に生きています。生まれた土地を耕し、牛や馬やニワトリを飼い、犬や猫といっしょに生活している。彼らにとって生きることとは明確だ。ただ漫然と何もしないでお金をもらい、他人を頼って生活することが生きることではない。生きるとは、季節を感じ、大きな自然の一部となって生かし生かされることだ。そのような人生のために彼らは放射能を受け入れたのだ。

(田口ランディ『寄る辺なき時代の希望』190)



## ゾーン:「どこでもない場所」

ゾーンというのはその土地の人にとって変質してしまった土地なので、もとからいた人にとって、もとの土地ではなくなってしまうわけです。つまり、現実的にはそこはもとの土地なのだけど、穢れた土地というイメージでとらえられて別の世界になってしまっています。

だから、それは誰にとっても未知の土地なのです。宙ぶらりんな、不思議な場所。そこにかつて住んでいた人も違和感をもつ土地になっており、この前まで慣れ親しんだ親密な空間であったものが、どべどべとした冷たい拒絶感と絶望感を伴う場所になっている。(中略)

どこでもない場所をもう一度自分たちの故郷として選択して戻って、そこに別のリアリティを打ち立てたのが、ブジシチェ村の老人たちであるわけです。  
(「田口ランディとの対話」、結城『他火のほうへ』91-92)

## 『ゾーンにて』4つの中篇

### 「ゾーンにてⅠ」

- ・主要登場人物：羽鳥よう子、工藤健一
- ・舞台：東京、福島市、飯舘村、南相馬市、浪江町、大熊町、川内村

### 「ゾーンにてⅡ」

- ・主要登場人物：羽鳥よう子、工藤健一
- ・舞台：東京、福島市、計画的避難区域

### 「牛の楽園」(ゾーンにてⅢ)

- ・主要登場人物：「僕」、マミ子
- ・舞台：東京、福島の警戒区域

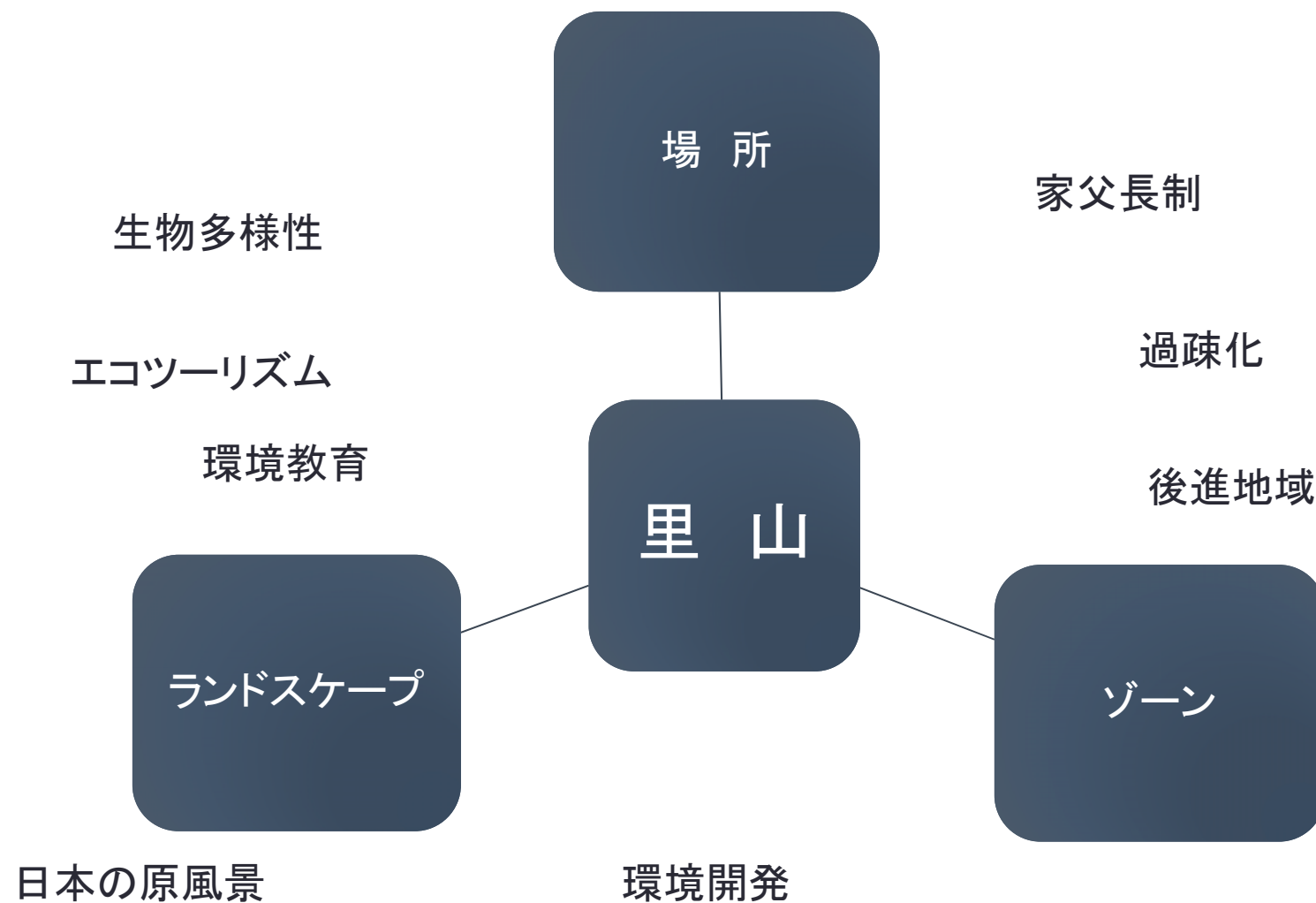
### 「モルモット」(ゾーンにてⅣ)

- ・主要登場人物：トキ、「私」、ルル(猫)
- ・舞台：猫底(半永久退避地域に指定)

## ゾーンの生物多様性

- 「モルモット」: アブラムシ(雪虫)、蟬、鶏、猫、山羊、アメンボ、野バト、野ウサギ、狐、狸、リス、鹿、熊
- 「ここにはかつてヒッピーと呼ばれていた人たちが作ったコミュニンがあった。……トキさんも四十年前に自給自足の生活を求めてここに移住してきたという」(184)
- 「トキさんたちが四十年かけて開墾した小さな盆地も、だんだん元の原野に戻りつつあった」(186)
- 「山の食材も豊富だった。山菜や木の実、キノコ、山ぶどう、野イチゴ、あけび、ムカゴ、ギョウジャニンニク。そして鶏が産んだ卵と窯で焼いたパン……。水稻以外は、大麦も小麦も作った。ヒエやアワの雑穀の粥や、きび餅。いろんなものを食べた。」(213)

## 里山ブームとは何か



## 引用・参考文献

- 有岡利幸『里山I』法政大学出版局、2004年。  
 ———『里山II』法政大学出版局、2004年。  
 今森光彦『里山物語』新潮社、1995年。  
 大串龍一「里山の問題(その1)」『河北潟総合研究』11 (2008): 33-38.  
 大牟羅良『ものいわぬ農民』岩波書店、1958年。  
 国際連合大学高等研究所／日本の里山・里海評価委員会編『里山・里海－自然の恵みと人々の暮らし』朝倉書店、2012年。  
 小林麻里『福島、飯館 それでも世界は美しい－原発避難の悲しみを生きて』明石書店、2012年。  
 武内和彦、鷲谷いづみ、恒川篤史編『里山の環境学』東京大学出版会、2001年。  
 田口ランディ『寄る辺なき時代の希望』春秋社、2006年。  
 ———『ゾーンにて』文藝春秋、2013年。  
 長谷川公一『脱原子力社会へ』岩波新書、2011年。  
 結城正美『他火のほうへー食と文学のインターフェイス』水声社、2012年。  
 湯本貴和編『環境史とは何か』(シリーズ 日本列島の三万五千年一人と自然の環境史1) 文一総合出版、2011年。  
 ———編『里と林の環境史』(シリーズ 日本列島の三万五千年一人と自然の環境史3) 文一総合出版、2011年。  
 渡辺憲司、野田研一、小峯和明、ハルオ・シラネ編『環境という視座－日本文学とエコクリティシズム』勉誠出版、2011年。  
 Duraiappah, Anantha Kumar, et al. *Satoyama-Satoumi Ecosystems and Human Well-Being: Socio-Ecological Production Landscapes of Japan*. Tokyo: United Nations UP, 2012.  
 Meli, Mark. “High-Vision Satoyama: Japanese Agrarian Landscape for Home and Abroad.” *Kansai daigaku tozaigakujutu kenkyujo kiyo* 44 (2011): 319-340.  
 Mycio, Mary. *Wormwood Forest: A Natural History of Chernobyl*. Washington D.C.: Joseph Henry P, 2005.  
 [メアリー・マイシオ『チェルノブイリの森－事故後20年の自然誌』NHK出版、2007年]  
 Porteous, J. Douglas. *Landscapes of the Mind: Worlds of Sense and Metaphor*. Toronto: U of Toronto P, 1990.  
 Said, Edward W. *Orientalism*. 1978. New York: Vintage, 1994.  
 Shirane, Haruo. *Japan and the Culture of the Four Seasons: Nature, Literature, and the Arts*. New York: Columbia UP, 2012.
- DVD
- ・『里山 人と自然がともに生きる』
  - ・『映像詩 里山 劇場版』